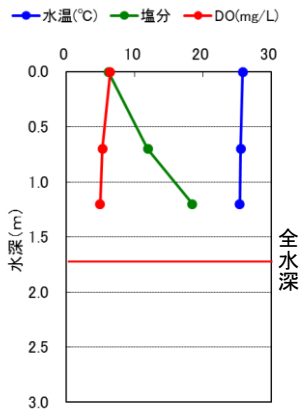
平成 29 年度　東京都内湾水生生物調査　8 月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

※値・種名などは速報値であり、変更の可能性があります。

地点名	St.31（多摩川河口）	調査年月日	平成 29 年 8 月 23 日　8:40　～　9:00

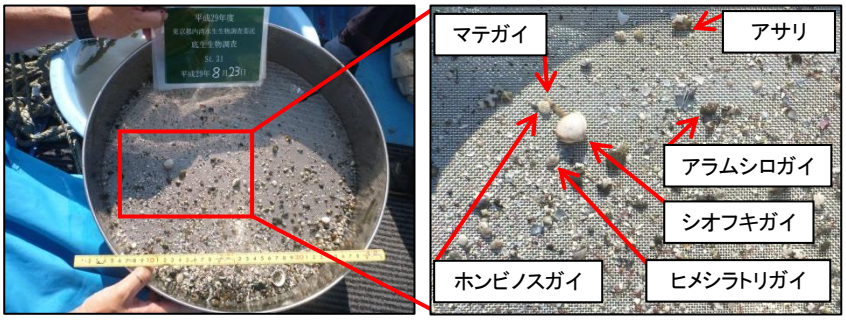
〈調査地点〉



〈地点状況、底質状況、底生生物出現状況〉

調査地点は多摩川河口部の川崎市寄り。工場の排水口の前面に位置し、水深 1.7m であった。干潮時には、川の中に立つことが可能なほど浅くなる。

底質は、砂であった。泥色はオリーブ黒色で、臭いは磯臭が微かにあった。



フルイに残った試料。5 月調査時同様に、アサリ、ヒメシラトリガイ、アラムシロガイ、ホトトギスガイ、マテガイ属の他、新たにホンビノスガイ、シオフキガイ等が採取された。

〈主な底生生物〉

日本各地の内湾潮間帯の砂泥底に生息する。本調査地点では、5 月調査時同様、小型の個体のみ採取された。

房総半島から南に分布する。内湾の干潟から水深 20m に生息する。食用にもなるが、内臓に砂を含む。

日本各地に分布し、内湾の潮間帯付近の砂泥底に生息する。

世界中に生息し、日本においても全国の砂泥性海岸の潮間帯に生息する。かなり汚濁の進んだ海域にも群生する。5 月調査でも確認された。

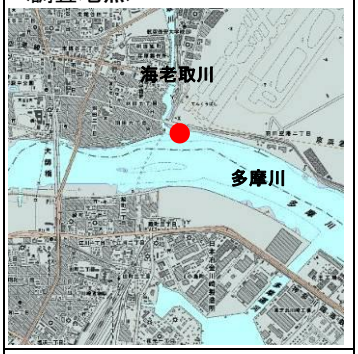
北海道から九州、中国大陸沿岸まで分布する。成貝になると殻長約 15cm まで成長する。生活環境が良くないと移動することが有る。

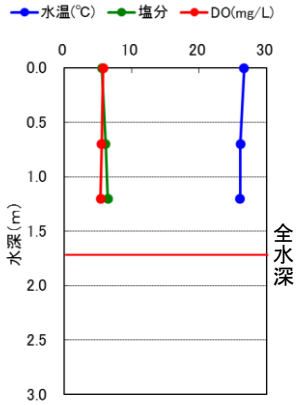
干潟に生息する小型の巻貝。北海道南部以南に分布する。死肉食性で魚類等の死体を食べる海の掃除屋。

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	平成 29 年 8 月 23 日　12:25　～　13:05

〈調査地点〉

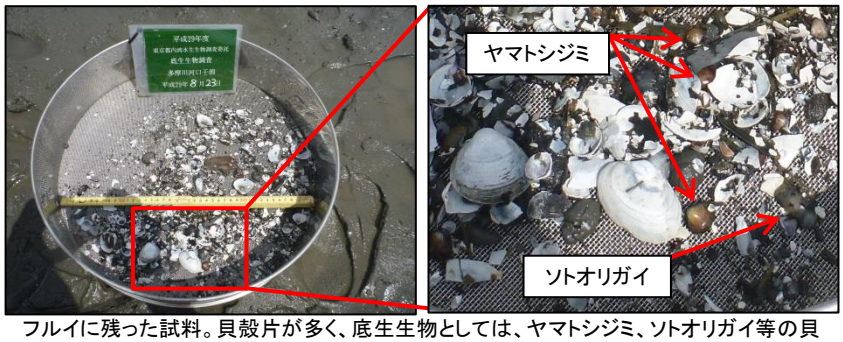




〈地点状況、底質状況、底生生物出現状況〉

多摩川と海老取川の合流点付近に広がる干潟。

底質は、シルト混じりの砂であった。泥色はオリーブ黒色で、臭いは無かった。



フルイに残った試料。貝殻片が多く、底生生物としては、ヤマトシジミ、ソトオリガイ等の貝類や、甲殻類、多毛類などが確認された。

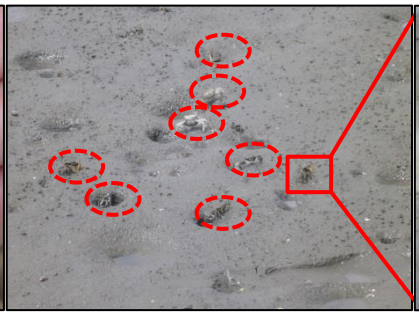
〈主な底生生物〉

ヤマトシジミは多摩川河口部で近年増加傾向にあり、大小様々なサイズの個体が確認された。調査当日はシジミを採る人が見られた。

日本では、北海道から九州に分布する。潮間帯から水深約 20m の砂泥底に生息する。貝殻は完全に閉じることは無く、常に太い水管が伸び出ている。

5 月調査時同様、本調査地点のみ確認された。最初に発見された北部九州の室見川に由来した名前を持つ。

砂泥中に体を横たえ、各体節から伸びる鰓だけを水中に出してイトミミズのように動かし、餌を集める。5 月調査でも確認された。

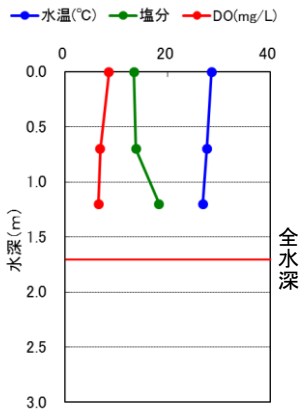


5 月調査時同様に地点周辺の干潟では、多くのヤマトオサガニが確認された。本州から沖縄までの内湾や河口干潟の泥底に生息する。干潟の代表的なカニで、干潟を利用する鳥類にとっての重要な餌になっている。

東京都内湾水生生物調査

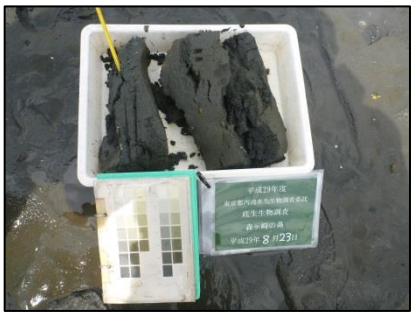
地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	平成 29 年 8 月 23 日　11:30　～　12:05

〈調査地点〉



〈地点状況、底質状況、底生生物出現状況〉

羽田空港北側に残された天然の干潟。調査時には、大潮の最干潮時だったため、広く干出していた。



底質は、砂であった。泥色はオリーブ黒色で、臭いは磯臭が微かにあった。

フルイに残った試料。貝殻片が非常に多かった。底生生物としては、アサリ、ホトトギスガイ等が確認された。

〈主な底生生物〉

5 月調査時と比べ捕獲された数は少なかった。近年、潮干狩り用に、各地で採られた個体が放流され、もともと居た個体群が消滅する危険がある。

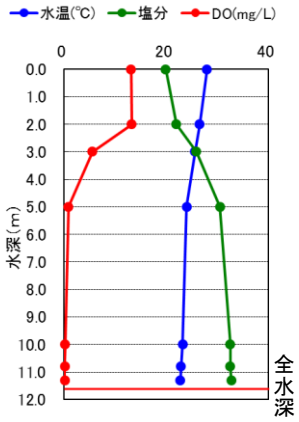
日本全国の内湾や汽水域に生息する。貝殻の茶色の模様が野鳥のホトトギスに似ることから名前がついている。

アメリカ東部原産の外来種。東京湾への移入手段は船体付着や移入水産種苗への混入による可能性が示唆されている。

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	平成 29 年 8 月 23 日　10:35　～　11:05

〈調査地点〉



〈地点状況、底質状況、底生生物出現状況〉

調査地点はフェリー埠頭と中央防波堤内側埋立地の間に位置する。調査時の水深は 11.8m であった。水深 4m 以深の DO は、2.0mg/L 以下の貧酸素状態であった。

水色が茶色であり、透明度も 0.9m と低く赤潮の状態であった。

底質は、シルトであった。泥色はオリーブ黒色で、臭いは硫化水素臭であった。

フルイに残った試料。貝殻片のみで、生物は確認できなかった。

〈主な底生生物〉

今回の調査で採取されたのは貝殻のみで、生物は確認できなかった。5 月調査時も下層は貧酸素だったことから、長期間の貧酸素状態により生物は移動もしくは死滅したものと考えられる。

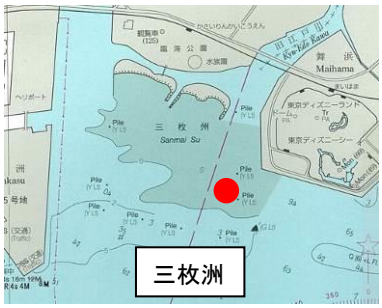
成貝でも殻長約 2cm で、半透明の薄い殻を持つ小型二枚貝。貧酸素に強い耐性を持つ。5 月調査では生息を確認したが、今回は貝殻のみしか確認できなかった。

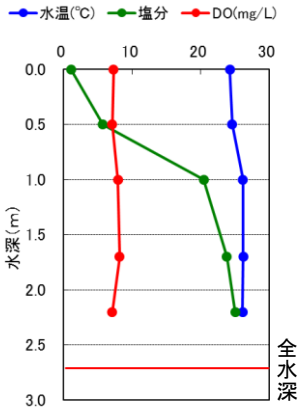
チヨノハナガイ同様、貧酸素に強い耐性を有するが、貝殻のみ確認された。

東京都内湾水生生物調査

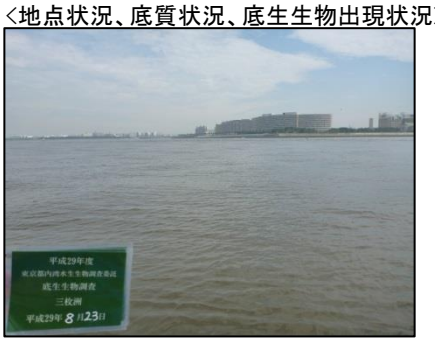
地点名	三枚洲（荒川河口）	調査年月日	平成 29 年 8 月 23 日　9:45　～　10:15

〈調査地点〉





〈地点状況、底質状況、底生生物出現状況〉



荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時は、水深 2.8m であった。

当日は、灰黄色に濁っていた。塩分濃度が極端に低いことから河川水由来と思われる。

底質は、砂であった。泥色は、黒色に近いオリーブ色で、臭いは磯臭が微かにあった。

フルイに残った試料。貝殻片が少なく、底生生物はハマグリ属、ホンビノスガイ、キセワタガイや多毛類等が確認された。

〈主な底生生物〉

ハマグリもしくはシナハマグリと考えられるが、稚貝のため断定は出来ない。両種共に内湾の砂泥底に生息する。

千葉県では、資源量が激減したアサリに代わって、漁獲対象種となっている。

北海道南西部から九州、朝鮮半島、中国大陸に分布する。浅海の砂泥底に潜って生息する。動物体は大きく、殻は体内に埋もれている。二枚貝などを食害する。

干潮時の水面より下の泥質底に住む。日本国内では東北地方本州南部まで分布する。汚濁の指標種でもある。